令和５（２０２３）年度第１回総合教育会議　概要

１　日　時　令和６（２０２４）年１月１２日（金）　午後２時２０分～午後３時２５分

２　会　場　柏崎市役所４階　４－３・４－４会議室

３　出席者　櫻井市長、近藤教育長、米谷教育長職務代理、阿部教育委員、梅田教育委員、飯塚教育委員

事務局（井比総合企画部長、宮川総務課長、宮崎教育部長、田辺教育総務課長、矢沢学校教育課長、山之内学校教育課主幹、木村学校教育課副主幹、伊比教育総務課長代理）

４　傍聴者　０人

５　報　道　新潟日報社、柏崎日報社、朝日新聞社

６　概　要

⑴　**開会挨拶**　櫻井市長

⑵　**議事**

ア　学区等審議会からの答申を踏まえた統合計画の確定について

学区再編方針における令和８（２０２６）年度統合分の計画確定について了解を得た。

［説明・意見交換］

（事務局）教育委員会では令和３（２０２１）年１２月に学区再編方針を策定し、令和４（２０２２）年４月に学区等審議会へ再編方針の諮問をさせていただいた。審議会から、令和６（２０２４）年度統合分を第１次として御審議いただき、答申内容及び保護者や地域の意見を踏まえ、昨年１１月の総合教育会議に、鯖石小学校と高柳小学校は令和６（２０２４）年４月に統合、東中学校と第五中学校の統合は見送りとの計画案を上程し、正式な計画として決定した。

本日は、審議会で第２次として御審議いただいた令和８（２０２６）年度統合分の計画について、協議いただきたい。審議会から、令和５（２０２３）年１２月に、日吉小学校と中通小学校、剣野小学校と鯨波小学校及び米山小学校の２件の統合方針について、「いずれも妥当」との答申をいただいた。第１次と同様、答申の内容及び保護者や地域の意見を踏まえ、計画案を作成したので、御説明させていただく。

（※事務局が別添資料「学区再編方針における令和８（２０２６）年度統合分の計画確定について【案】」により説明）

（市長）　今の説明に関して、御意見を伺う。

（阿部）　学区等審議会の答申のとおり、現段階においては、この案が最善と考える。この統合が子どもたちへ望ましい教育環境が提供できることを御理解いただき、今後も皆様から御協力を賜わりたい。義務教育において大事なことの一つは、基礎学力の向上と考える。教育委員として学校訪問等をする中で、この点で複式学級は少し無理があると思う。もう一つは集団生活におけるルール、マナーの幼少期からの確立である。長い人生において絶対に必要なことであり、一定の集団の中で学ぶことが望ましい。今後は、少子化や人口減少が急速に進んでいく中でタイミングを計りながら検討していく必要がある。

（梅田）　アンケートや地域の意見交換会で様々な御意見を伺い、子どもたちのことを考える保護者の思いや不安、学校や地域への思いをお聴きした。一方、学校訪問で学習面や子どもたちの様子を見ると、複式学級の解消については必要性を感じている。自分や子どもも小規模校だったが、行事や授業において、工夫しても制限が出てくることや、子ども同士の関わりが広がらないといった課題を感じたことがある。多くの子ども同士が関わり、多様な考えに触れることで学習意欲やコミュニケーション力を育むことが、子どもたちの成長に大切な環境であると実感している。子どもたちの可能性を信じ、学校を新たに作るとの意識が持てるように話し合いの場を作り、子どもたちが楽しく、安心・安全に通える学校や教育環境を一緒に考えていけたら良いと思う。

（飯塚）　人口の変遷と今後の推計から、人口減少の傾向はすぐに変わらず、地方に子どもが少なくなることを逆転することは容易ではないと感じる。柏崎市に限らず地方はどこも同じような状況だが、ウェルビーイングと言うか、大人が町に対し希望を見出していく、また、チャレンジをする姿を子どもたちに見せること、それがひいては、柏崎で子どもを産み育てることに繋がっていくのではないかと考える。大人が柏崎に対し、諦めではなく、希望を持つことが非常に重要である。諦めている大人を子どもが見て、この町に希望を持てるかというとなかなか難しいと思う。そのようなマインドを、市全体として上げていくことが大事だと考える。

（米谷）　小・中学校の統合、再編は、少子化の急速な流れの中で、子どもたちの教育環境の充実を考える議論だと捉えている。学区等審議会で綿密な熟慮を重ねて答申を提出いただき、審議会の皆様への感謝、そして敬意を表したい。教育委員会でも、教育現場の経験がある行政職員が再編案を作り、そして、地域や保護者の意見を聞き、また熟慮を重ねて、子どもたちの教育環境の充実を最優先に考えた再編案として策定した方針であり、信頼している。

学校訪問の中で、小規模校の人間関係の温かさ、地域からの協力に基づく地域の伝統や生活に根付いた学びは、子どもたちにとって良い学びであると感じる。長期的な視点での小・中学校の在り方を考えていく中で、市の財源に関わることとも思うが、保護者のニーズがあれば、小規模校を１校でも残すことを一案として考慮に入れても良いと思う。一方、現在の社会は、仕事でも日常生活でも常に誰かと繋がっているような状況になってきている。これから社会に出る子どもたちは人間関係の経験が本当に大切になる。小・中学校時代に同年代の大勢の仲間と関わり、問題にぶつかりながら自分なりの解決方法を見つけていくことは、非常に重要であり、一定数の人数が確保された環境で生活するメリットは大きい。小規模校も大規模校もいろいろなメリットがあるため、柏崎市立の小・中学校はどういう方向に持っていくかを長期的な視点で考えることも大事だと考えている。現状では、この計画案のとおり進めて良いと考える。

（市長）　総合教育会議は、協議すること、調整することが役割であり、決定や議決する場ではないため、議事（１）学区等審議会からの答申を踏まえた統合計画の確定について、御了解をいただいたということでよろしいか。

（委員）　異議なし。

イ　不登校児童生徒の現状と課題について

不登校の現状や課題、市の取組について共有を図った。

［説明・意見交換］

（事務局）小・中学校における不登校児童生徒の現状と課題、また改善に向けた取り組みについて御説明させていただく。

（※事務局が別添資料「不登校児童生徒の現状と課題」及び「別紙資料　柏崎市不登校の現状」により説明）

補足として、学校規模の大小と不登校生の割合に、傾向や特徴は特に見られなかった。（２）の要因について、調査項目にはないが、コミュニケーション能力の未熟さによるもの、保護者や社会の動向として、欠席した場合に無理に登校刺激はしないという考え方が出てきていることも挙げられる。

資料「不登校児童生徒の現状と課題」に記載の取組は、不登校の児童生徒もしくは不登校の傾向を示す児童生徒への支援体制だが、不登校の未然防止の取組として、課題のところで挙げた安らぎや居場所の確保、分かる授業、支持的風土の学級作り、コミュニケーション能力の育成が重要となる。

（市長）　今の説明に関して、御意見を伺いたい。

（飯塚）　このようなサポート体制の充実や相談窓口の拡充は、親御さんにとっても非常にありがたいと思う。それと、「どうしても学校に行かなければならない」という風潮から変わってきていると思う。その子どもにとっての幸せを考え、学校に行くことはもちろん良いことだが、フリースクールといった学校以外の選択肢も整えていくことで、子どもに必要以上のストレスを与えないという考え方がさらに広がっていけば良いと思う。

（梅田）　居場所がとても大切だとの説明があった。児童館でも家庭でも学校でもない第３の居場所が地域にあることで、子どもたちの声を聞き、寄り添った対応ができる。子どもとのキャンプの中で、不登校の悩みやいじめの相談を受けることもあるので専門機関と連携して取り組んでいけたらと思う。また、県の教育施設でも、学校に行けない休みがちな子どもたちを対象にしたキャンプを実施している。悩んでいる子どもたちが相談できるきっかけの場所を情報提供いただくことも大事だと感じた。

（米谷）　生活リズムを整えることが未然防止につながると考える。小・中学校時代に家庭の中で生活リズムを整えないと、不登校になってからの取り組みがとてもやりにくく、効果は低いものになる。また、登校刺激を与えない、無理をさせないことも一つの方法だが、将来のことを長い目で見ると、義務教育のうちに生活習慣を整える、しっかりとした学力を身に付けることの大切さを親が認識することはとても大切である。子どもさんの状態によっては、登校刺激を与えない方が良い場合もあると思うが、親と子どもの信頼関係の中で「学校に行くことは大切なことだよ」と話し合うことで、理解されるお子さんもいらっしゃると思う。この考えは、少し時代に反しているかもしれず、反対意見もあると思うが、そのようなことも考えていくべ

きだと思う。

（阿部）　子ども１人１人事案が同じものはないため、踏み込めば良いのか、一定の距離感を保った方が良いのか、非常に難しい。子どもたちの心を丁寧に開いていき、自分がどのような状況であるのか話ができることが突破口であると思う。現在、労働に就けない、働くことができない成人が大勢いる。将来を含めた長い目で捉える必要がある。思春期サポートチームのようにチームになって取り組むことが大事であり、それしか方法はないと思う。昔も今も不登校があるのは現実であり、休まずやるしかないと考えている。

（市長）　思春期サポートチームについては、新潟病院の先生も加わっていただき、専門の観点から子どもたちを支える体制が整い、より充実してきたことは非常にありがたい。ひきこもり支援センターについては、教育委員会が一緒になって子どもたちを支えており、小・中学生のみならず、高校生も含めて対応している案件も承知している。それほど大差はないかもしれないが、全国や新潟県の平均よりも柏崎市の不登校児童生徒の発生率が低いことは、教育委員会、引きこもり支援センター、子育て支援課、子どもの発達支援課がそれぞれ手を携えて子どもたちを支えていることの証拠だと自負している。

また、今回の学区等審議会の答申は、非常に素晴らしいものである。率直な御意見と、苦言も含めて私達の方向性についてお示しいただいたことを、感謝申し上げたい。

それでは最後に近藤教育長から感想を含めて御見解をいただきたい。

（教育長）たくさんの御意見、感想をいただき感謝する。議事（１）については、学区等審議会の皆様に改めて御礼申し上げたい。独りよがりになりがちな計画を、第三者である審議会が地元や保護者の声を聞き、慎重に審議いただいた結果、方向性は概ね間違っていないとの答申をいただいた。ただし、そこには多くの宿題や課題もあると思っている。教育行政を預かる身として粛々とこの計画を推進していく。また、個々の事案に対しても、できる限り御要望に沿えるように努力をしながら進めていく。議事（２）不登校は、本当に大きな課題である。その原因は非常に多岐にわたり、１０人いれば１０人違うと思うが、柏崎は思春期サポートチーム、チーム柏崎、ＳＳＷ柏崎といった強力なチームがある。ぜひ、これらをいかしながら子どもたちの希望する方向に向かえるよう、今後も支援したい。また、子どもたちのみならず、保護者も合わせて将来や幸せを考えながら支援していく。本日は、二つの議事について、多くの御意見を賜り、改めて感謝申し上げ、御礼の言葉とさせていただく。

（市長）　以上で議事を終了とする。教育委員の皆様に感謝申し上げる。

⑶　**閉会**